教職の専門性とは
～なぜ１年目から先生と呼ばれるのか～

教職の専門性を考えるときに、いつも思い出す出来事があります。それは、私が中堅教員だったころ、とある用事で県立高校のある校長先生を訪ねた時のことです。

その校長先生が私に、「実は昨日、バイクで通学している生徒が、一旦停止を怠って交通事故を起こしたんですよ。そこで、新採用の担任の教員にしっかりと学級指導をしてきないさいと言ったんです。放課後、その先生からどのように指導したのか、と聞くと、ホームルームの時間に、交通ルールを守ることの大切さを伝えました、特にバイク通学の生徒は気を付けるようにと指導しました、と言ったので、私は、そんな指導なら、その辺にいるおじさんやおばさんだってできるじゃないか。あなたは教師だろう？教師としての専門性があるんじゃないのか？と聞いたんですよ。」と言いました。

この話をここまで聞いた私は、はて、この教師の指導はどこがいけなかったのか、と思いました。校長先生のおっしゃる教師の専門性って何だろう？とすぐに回答が見つかりませんでした。

すると校長先生が続けてこう言ったのです。「担任として、ほかの誰にも負けないことは、自分の学級の生徒のことを最もよく知っていることだよ。その上に立って、事故を起こした生徒のことや、学級の生徒たちの普段の様子を織り交ぜながら指導することが大事なんだよ。それこそが、ほかのどの人にも、どの先生にもできない、あなただけができることなんだから、と私は言ったんですよ。」

ああ、そういうことだったのか、と胸をうたれました。そして、そのことにすぐ思い至らなかった私自身の未熟さも痛感したのでした。

考えてみれば、大学を出たばかりの社会人１年生の若者でさえ、１年目から「先生」と呼ばれるのはなぜか。その本当の理由は、教員採用試験に受かったからでもなく、教員免許状をもっているからでもありません。それは、自分の学級の児童生徒のことを誰より一番知っているからなのです。

教職の専門性とは、何でしょうか。私が考えるには、二つの要素があると思います。

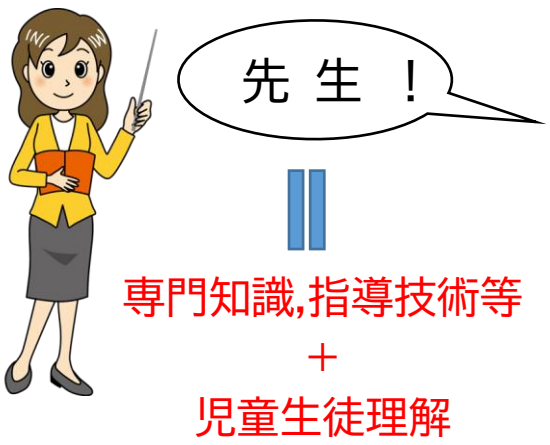
一つは、教職に係る専門的な知識や指導技術、そして人間性等です。これは、教員免許状をもっていることがまず前提条件になりますし、研修を積みながら指導技術を磨いていくことも重要です。また、これからの未来を担っていく子どもたちを教えるわけですから、しっかりとした人間性を持っている人でなければならないことは当然のことです。別に聖人君子であるべきと言っているのではありません。子どもとともに成長できる人間であればよいのです。国語指導の第一人者であった大村はま先生は、「教師にとって大切な資質は何ですかと聞いた時、子どものことが大好きですと言う人がいますが、当たり前です。子どもが好きでない人に教師をやってもらったら、子どもはたまったものではありません。また、情熱を持っていることですと言う人もいますが、これも当たり前です。情熱のない人が教壇に立てるでしょうか。それらは当たり前に持っている資質であって、教師とは、その上に立って、専門性を持っていなければならないのです。」とおっしゃっています。

もう一つは、冒頭で述べました、児童生徒のことを一番よく知っているということ、つまり、児童生

徒理解です。担任にしかできないこと、担任だからできること、これが児童生徒理解です。もちろん、担任をもたない教員もいるでしょうから、そういう人は、授業に行く児童生徒理解ということになるでしょう。そのベースは、「観察」だと思います。観察と言っても、ただ見ているだけでは深い理解は出来ません。時には一緒に遊び、時には話し相手になり、できるだけ、児童生徒の中に入って、ふだんの学校生活の中でのなにげない触れ合いが、児童生徒を理解する手助けになると思います。私の経験では、いつもふざけてバカな事ばっかり話していた生徒が、ある時、突然、「先生、実は、私はね～」と、大事なことを話してくれたことがありました。人が心を開くというのは、一朝一夕にはできません。しかし、そこに教職の醍醐味もあるのだと思います。

児童生徒理解の上で、大切なことの一つに、子どもの SOS をキャッチするということがあります。どうしたらできるのでしょうか。児童生徒自ら「先生、困ったことがあるんですけど」と言ってきてくれれば有難いですが、ふつうはそうはいきません。だから、人間関係をつくっていくと同時に、児童生徒の少しの変化も見逃さずに、こちらから「どうした、元気ないな、何かあったのかい？」と声掛けをすることも大事です。それでも言ってくれないことも多々ありますが、そういう態度で教師が接していることで、話をしてくれるようになると思います。「子どもは思っていることの１％も口に出せない。だから教師は常に子どもを観察して、何か異変がおきていないか、確認することが大切である」と、ある教育書にありました。肝に銘じたい言葉です。

もう一つ事例を述べます。それは、私が若い時にある先輩教師が口にしていた言葉です。「今年の 1 年生は成績がよくないなあ。去年の１年生はとてもよかったのに。いくら一生懸命教えても全然わかってくれないんだよ。」この言葉から、生徒理解は一応できているといえます。成績が悪いという客観的事実をつかんでいるからです。しかし、それに対しての手だてはどうでしょうか。一生懸命教えてもだめ、ということは、生徒の問題ではなく教師の問題なのです。つまり、成績が今一つよくない生徒たちに対して、昨年と同じ教え方をしても上手くいかないのは当たり前です。今年の生徒の特長に合わせた教え方をして成績を伸ばしてやることが私たちの使命です。これがもし医者だったらどうでしょうか。「今年は、重症の患者が多いな。去年と同じ処方をしても治らないから、困っちゃうよ」などという医者がいるはずがありません。重症患者にはそれなりの処方をする必要があるのです。それをするのが医者の仕事です。それが医者の専門性なのです。だとすると、先ほどの教師の言葉はまったく恥ずかしいとしか言いようがありませんね。

私たちが児童生徒や、保護者、また一般の人からも「先生」と呼ばれる理由をよく考えて、その呼び名に恥じないように努めていきたいものです。それはとりもなおさず、目の前の子どもたちのためなのですから。

市川三郷町教育長　渡井　渡